

四十一、 相对界と絶対界

凡夫は相对差別の世界だけに生き、二乗は絶対平等の世界だけに生きようとする
と説かれる。

平等一如の世界を知らずして、差別の世界に生きるかぎり、差別にも生きたのでは
なくて差別に囚われて流転するのであるし、平等を知るといふといえども、差別を照
らす智慧がないかぎり、真に平等一如に生きたのではなくて、生死の差別を逃避した
のであり、平等の世界に囚われたのである。

しかるに眞実智慧光に生きる菩薩は、平等なる法に帰依するとともに、その智慧
は、差別の世界すなわちわれおよび人生の眞実の相を見ると説かれる。

念仏の行者は、聖道門の菩薩の世界に生きるものではない。しかし仏の智慧光に
攝取され、照らされて生きるものである。信心の智慧は、如来本願の大法の平等を深
信するとともに、差別の機を照破されて深信するのである。機を深信するがゆえに、
法を信するのであり、願力の法を深信するがゆえに、機の真相を深信してしかも救わ
れるのである。これを如来廻向の信心の智慧といわれる。

しかるに、もし大法を聞きつつも、その機の真相を照破されることなく、自力の根
が滅しつくさず、信心が浄土の大菩提心でなくて、自力が、大法を弄び、かえつて勝
他名聞の具にせんか、大法も単なる学識となり、その憍慢心を増すばかりとなるであ
らう。

通仏教において二乗と説かれるものも、浄土門において化土の人と説かれるもの
も、ともに、憍慢なるがゆえに己の相を見ず、己を見ざるがゆえに一処にとどまつて
精進なき懈怠なるものである。ゆえに二十願自力の念仏の世界を、とくに懈怠界とい
われる。この懈怠界より出でんとすれば、しよせん宿善開發して、より明らかに仏智
によつて照破せられて、自力を出るよりほかにはあり得ない。自力我慢が滅んでの
み、己が真相を深信して、本願の法に帰入し得るのである。

信心の智慧は内に開くものであり、生活は外に光るものである。

自力は魂の奥の院にかくれるものであり、五逆十悪の生活は外に出るものである。
されば、外の生活の善も不善も、その内心の善不善によるのである。

いまだあまり法縁に会つたことのない女が、自殺を計つて人事不省になつた時、そ
の枕辺に「聖光」が置いてあつた。それゆえにわれらが団まで疑われたということであ
る。

あるありがたい団員は、病院に入院して朝夕「光明」「聖光」を読み、お念仏を申し
て、病床にありつつありがたい生活をしていた。いつのまにか、隣室の患者に伝わ
り、真に念仏するに至り、新しい同胞を造つた。また、その病院を慰問した某会の会
員たちは「多くの病室中たつた一つ、ある部屋の様子は違つていたが、あの方はどう
した方であろう。」と感じ入つて語り合つたとのことである。

平等一如の浄土に通ずる信力は、必ず外に漏れ現われて、差別相對の世界に光る。

蓮如上人教えていわく、

「聖教をよく憶えたりとも他力の安心をしかと決定なくは徒事なり」と。

またいわく、

「一。信心治定の人は誰によらず先づ見ればすなはちたふとくなり候。是れ其の人のたふときに非ず、仏智を得らるるが故なれば、弥陀仏智の有り難き程を存すべきなりと云々。」

まことにみ教えのとおりである。信心治定の人は、仏智を得るがゆえに尊く拝まれる。業報による差別をそのまま生かしたもうのである。であるから仏智は差別を生かす平等の光である。

教えを聞かねば信心は得られないが、教えを憶えただけでは信心は得られない。むしろそれでは傲慢を増長する。

求道に熱心な子が親の許しを得ず、書き置きなどして家を出ることがある。私はけつして賛成もしないし喜びもしない。親の許しを得ず、親をすてて走るがごときは差別の世界を無視するものであり、仁義礼智信、人間五倫五常の道に反するものである。

普通に人は、もし人と人との間に問題がおければ、悪かつた方が自らわび、人ももつて謝罪して、その問題の解決されんことを求める。弟子は師の怒りを、子は親の勘気を、妻は夫の許しを、朋友は友の絶交を、すべてひたすらに謝りこれを許しとか2れんことを求める。これ相對の世界における当然の道である。

念仏の子は、かかる過ちを自ら犯したる時、こうした謝罪の道、当然の道をゆきつつ、それを通して、さらに、自己の領解を深め、より深く懺悔して、いよいよ大悲広大の恩を知るのである。

しかるに、もし念仏申すがごとくにして、父の怒りも、師の叱責も、友の絶交も、これをそのまま、念仏の縁とするといい、合掌の中に受け取ると言いて、あえて謝らず、許しを乞わず、あるいは遠く去り、あるいは鉄面皮に、時間的推移のままに放任し、あるいはかかる自己の致命傷を知る人をさけて、なおかつ世に厚顔無恥をさらすがごときは、まことに、念仏なき世間の人よりもなお劣るあさましさといふべきである。これ平等なる念仏の世界への逃避であり、自己の真相および自己の世界に打ち当たることを恐れるものである。

名利心の深き人間の子は、そしてその名利の心をみ光に照らしきられず、名利心を恥じず傷まぬ人の子は、しばしばかかる常識にさえ劣る世界を、しかも念仏の名において行こうとし、また行くのである。しこうしてかかる絶対の世界に偏つて、差別の世界を無視する生き方は、教えをひたすらに聞く同行よりも、御法を説き、念仏を宣伝する教役者に多いことを悲しまざるを得ないことである。

その心中には、いまだ教えによつて爆撃されず、光によつて消え失せぬ自力心が、漸く硬化して心の石となるものである。念仏の子の恐れても恐るべきは、この硬化する心中の大盤石である。これみな、真実十八願の大信成就せず、如来如実の光明を

聞かず、そのために、第三十三觸光柔軟の巨益を得ざるものである。身意柔軟の文字は大經においては、この世の行者においても、あの世の菩薩においても、その徳を語る最重要の文字である。

蓮如上人仰せられていわく。

「一。我ばかりと思ひ独覚心なること浅ましきことなり、信あらは仏の慈悲をうけとり申す上は、我ばかりと思ふことはあるまじく候。觸光柔軟の願候ふ時は、心も和ぐべきことなり、されば縁覚は独覚のさとりなるがゆえに仏に成らざるなり。」

この文によれば、仏の慈悲を受け取ることによつて柔軟心は得られるのである。しかるに独覚は、柔軟心成就せず、それゆえに「わればかり」と思い、あるいは「わればかり」にならうとするのである。だからかかる独覚心は仏の慈悲を受け取らぬ者であることが知られる。仏の慈悲こそ、衆生の独覚心を消除して、柔軟心を成就したものである。大慈悲心こそは、平等なる彼岸より、闇なる生死差別の世界に限りなくはたらきかけたもう心である。であるから慈悲は、生死差別の世界に交渉し、随順する心であり、この慈悲心によつておこる柔軟心も、差別の世界に限りなく随順しようとする心である。

そこでわれらは、念仏に生きる人の中に、真の忠臣を見、孝子を発見し、夫婦の真の相和を見出すのは当然といふべきである。

念仏こそ真の孝であり、師弟道であり、慈悲であると説かれた聖人の世界もまことにありがたく頂けることである。

しかるに、念仏こそ真の孝道であるということをして、己の真相、五逆不孝の煩惱を内に見ることなく、念仏するがゆえに、念仏せざる親を見下し、夫を尻の下に敷き「わればかり」と思うに至り、ついには一步度を超えて親を念仏せざるがゆえに罵倒し、苦しめ、ついには手にて打つがごときは、独覚心のはなはだしきものである。親を救うと称して家出したり、非常手段をとるがごときも、その内心には、自ら得たりとする高慢なる独覚心を持つものであり、時には、氣に入らぬ親に背をむけて、念仏に名を借りて親を逃避するものである。幾歳求道するとも、その容顔ついにみ光に輝かぬであろう。

智慧は光である。しこうして内に開かれたる眼である。ゆえに特に智慧光といわれ、智慧眼といわれる。この光、この眼、外にむかつては、ものの真相価値をほのかに照らし出す光となり、その価値を拝む眼となるのである。蓮如上人が、廊下などに落とされたる反古一枚すら、聖人の御用物、仏法領のものとしておし戴かれたのも、聖人が身につづれをまとう貧しき念仏行者さえ、御同朋御同行と讃え等正覚の人とせられたのも、この活眼によるのであり、この智慧光によるのである。

十八願の信心とは、まことにかかる内に開く眼である。されば、念仏門に入るがゆえに、かえつて世の相對の物すべてを軽んじ、拝まず尊重せざるがごときは、独覚の臭味であつて、真に万象の上に眼の開け初めたものではない。

実に絶対界より開かれたる信心の智慧の世界とは、如来を拝む眼であるとともに、大樹の根幹に立ち価値の本源に立って、一切のものの上に尊いものを拝まんとする生活であった。